

## 里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	里地里山の現状把握とモニタリングの推進
手法名	生物多様性保全にむけた生物モニタリングのポイント
主体	日本野鳥の会 愛媛支部
背景 (地域の課題)	愛媛県西条には冬期にコウノトリが飛来し、水田等で採餌する様子が確認されている。コウノトリが定着するような環境づくりを考えるにあたり、鳥類を指標として水田など里地里山の生物多様性を保全するため、生物との共生のために必要な視点を、地域住民がもつことが必要である。
手法/方策の詳細	<p>生き物との共生を図るには、まずどこに、いつ、どのような生き物があり、それがどのような環境を利用しているかを通年のモニタリング調査により把握し、生物と生物の関わり、生物の環境の関わりを確認することが重要である。そのことが、生物多様性保全のためにどんな環境が必要で何をすべきか、という点に繋がってくる。</p> <p>鳥類のモニタリングの方法として、ラインセンサス法がある。ラインセンサス法は、時速約2キロメートルで歩きながら両側50メートル以内の出現鳥類を記録する方法。</p> <p>例えば愛媛県西条市・東温市上林でのラインセンサスの事例では、セッカ、カワラヒワ、ハクセキレイ、ヒバリ、スズメ、ハシボソガラスが優占種で、6月に水田を餌場にする主にサギ類が増える。8月頃は、米が実るためスズメが集まる。ミヤマガラスは田んぼに冬に集まるカラスで、夏はハシボソガラス。ミヤマガラスは中国から渡ってくる。</p> <p>調査から分かることは、冬にミヤマガラスが多い背景には、冬にエサが豊富だからで、それは農機具がバインダーからコンバインに変わり、脱穀まで田んぼで行うことで、落ち穂が増えたことによると考えられる。農機具の変化が鳥の行動の変化を生む。耕作してない田んぼには昆虫やネズミがあり、猛禽類やツルが来る。田んぼの周辺の里山にはホオジロ、ウグイス、高木林がある神社ではヤマガラやキビタキが確認できる。</p> <p>森の面積、田んぼの形態、などにより生息する鳥が変わる。</p> <p>地域の生物多様性を保全するには、まず地域にどんな生き物がいるのかを知り、生き物と生き物、生き物と環境の関わりを知る、その上で、守る方法を考え、実効し、検証し、継続することが必要である。最初は経験のある人と一緒に、地域に住んでいる生き物を把握するとよい。</p>
手法・技術的視点	モニタリング自体を目的とせず、その調査結果の活かし方、データの評価方法を専門家から学ぶ機会があると、地域内の普及にも有効と考えられる。
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;"><b>多様性保全に向けて</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域の生き物の存在を知る</li> <li>2. 生き物と生き物、生き物と環境の関係を知る</li> <li>3. 守る方法を考える</li> <li>4. 守る方法を実行する</li> <li>5. 実行した効果を検証する</li> <li>6. 継続的に実行する</li> </ol> </div> <div style="width: 50%;"> <p style="text-align: center;"><b>愛媛の水田の鳥</b> <span style="float: right;">種類数の季節変化</span></p> <p style="text-align: center;"><b>愛媛の水田の鳥</b> <span style="float: right;">個体数の季節変化</span></p> </div> </div>
参考資料	里なび研修会in愛媛 山本貴仁 石鎚ふれあいの里代表